

## 「特攻攻撃」と日本海軍につき思ふ（下）

令和二年九月 加藤 淳平

（承前）今試みに、（上）の特攻隊員、同隊長及び福留、大西の海軍軍人が、大東亞戦争中の母國への貢献を、戦力の観点より、評価して見む。操縦技術未熟にして、「無駄死に」せる少年航空兵等とて、母國への貢献、零なりしには非ず。些少なれども貢献ありと、評価し得べし。されど特攻隊長の、自機を見事に、エンタープライズ甲板に命中せしめたるは、少年航空兵等を、遙かに上廻る評価とならむ。

さりとして少年航空兵等も、十分なる訓練を施さば、時に、隊長に匹敵せる戦力に達するも、可能なりけむ。また特攻隊長の、操縦技術ならば、唯一度の特攻攻撃にて、之を消耗せず、（上）に述べたる如く、實戦にありては、特攻攻撃ならで通常の攻撃に、反復参戦せしむるか、或いは少年航空兵等が、教育と訓練に従事せしむるか、何れかにより、更に多くの貢献を、爲し得たるに非ずや。

大西瀧治郎の、特攻作戦を開始したるは、レイテ戦、當時日本が最終戦なりと、意識せられ、何らかの戦果を挙げ得れば、その機に政府は、米國と、和平交渉を進むる意向なりしかば、大西が決断、理無きに非ず。練度低き少年航空兵なれども、之を初めて特攻に使ひ、米軍に、多大の損害を與へ得たれば、初期の特攻作戦、軍事戦略的にも、正當化せられむ。また大西、日本敗戦時に、自らに最大の苦痛を與へ、自決せるは、己が生命もて、自らの決断の責任を取りたるにて、さすが武人の行動なりと、人を感銘せしむ。

されど大西の行動、瑕疵無きに非ず。一は、最初の特攻攻撃の隊長に、關行男なる練達の航空士官を任命し、渠にも特攻死を強ひたること。關は出撃前、一従軍記者に對し、自分の如き、通常攻撃に於て、多大の戦果を挙げ得る者を、特攻攻撃にて、消耗するは愚策なりと、述懐せりと傳ふ。二は、大西一人の責任には非ざれど、レイテ戦の敗北後も、十年一日のごとく、特攻攻撃を續けたること。之により米軍、即應態勢を完成せしめたるは上述せり。

斯かる瑕疵あれど、大西の特攻作戦を構想し、實行して、敗戦とともに責任を取りたること、全體を評價せば、相當大なる評價を、爲し得るに非ずや。

然らば福留繁は如何。捕虜になりて、機密書類を喪ひ、米軍に入手せられたる可能性を、

一切隠匿、若しくは否定し、米軍の、自分が日本海軍の將官なるを、知りたるが故に、假の將官が名を名乗りたるも、解放後米側は自分を、軍屬と思ひ居れり等、虚偽の報告を爲しつ。また解放後、司令官職に任せられ、「臺灣沖航空戦」を指揮して、誇大なる戦果を大本營に報告せるのみか、大本營をして、報告通り發表せしめたり。こはフィリピン作戦の各戦鬪を、全て敗北せしめ、政府と軍首脳部に、矜持を失ふことなく、米軍に、和平を申入るる機を、得ざらしめたる、絛上の福留が行動の、

結果ならずや。斯く、和平を申入るる機を得ずして、ずるずると戦争を繼續し、數多の陸海軍將兵のみか、一般國民多數まで、死に至らしめたる責任の、少くも一部を、福留が負ふは、當然のことならずや。

されば福留が評價、負の評価、即ち敵が利、我が害を圖れるものと、ならざるを得ざらむ。それも些少ならず。相當大なる負の評価に及ぶべし。

惟ふに、彼の大戦争、國運を賭け、國の全力を盡せる戦争なれば、日本の將兵も國民も、大多數が分に應じて、各自寄與せるに非ずや。されど寄與の大いさ、人により異なれり。特に高級軍人が中には、上の福留海軍中將の如く、國の戦争努力に、寄與せりと思ひ得ず、寧ろ敵を利したるに非ずやと、疑はるる者尠からず。

海軍に、福留の如き者あれど、陸軍には、巷間、「陸の三馬鹿」なる言ひ方ありて、寺内壽一、木村兵太郎、富永恭次、牟田口廉也のうち三人、東京裁判にて、死刑となりし故に木村を除く者多し。

何れも傲慢にして、怯懦なる軍人なれど、軍の要職を占め、敵が利、我が害を圖りて、恥を中外に曝せり。

我らが日本、敗戦とふ未曾有の大災厄のどん底より、這ひ上り、再出發せるなれば、本來何故に、敗戦に至りしやの原因の、詳細を究めざるよりは、大災厄の再來を防遏すること難く、敗戦に關與せる指導者が責任を、嚴しく吟味せざるよりは、健全なる再出發を、爲し得ざるに非ずや。

されど敗戦後の日本、敗戦に至りし原因の究明も、指導者が責任も、戦勝國に、判断を委ねたるのみにて、國として、國民としての判断を、爲したること無く了りぬ。戦勝國が判断、恣意的にして不正なりせば、日本人の多く、之に反撥し、敗戦原因と、指導者が責任の究明自體に、反感を抱きたるに非ずや。されば戦後の日本、終に、自國の誤りと、如何なる人

が、誤りを冒せるやを究明せず、歴史に学ぶこと無かりせば、今も戦中と同様の誤りを、冒す虞れ大なるべし。

戦後の日本人が思考に據らば、人は皆平等にして、人一人一人の違いは、さして多からずとす。

されどそは、偏向的思考ならずや。戦時の行動、事績をつぶさに見れば、上の自らを犠牲にせる特攻隊員と福留、インパール作戦の死闘を戦ひて敗れ、「白骨街道」に命を落としたる兵士と、避暑地メイミョーに連日酒と女の日々を送り、敵の迫るや逸早く逃亡せる木村、牟田口が如き輩と、果して違ひ多からずと、言ひつべきや。

各人が違ひ、戦時にありては歴然たりき。されど現在の日本の如き、平時にありても、我らとて、例へば政治家が、個々の資質と行動の違ひの、國と國民に及ぼすべき影響の違ひを、仔細に評價する必要あらむ。

（福留中將が行動、吉村昭氏が『海軍乙事件』に従ふ。小説家が記述に過ぎずと思ふ者あらむも、吉村氏の世に出でずして、學習院文藝部にて、文筆修行せる頃、同文藝部に、我が友人あれば、吉村氏の取材に、如何に厳正なりしかを知れり。されば我、同氏が記述の厳正なる事實なるを疑はず。）

（令和二年八月二十五日受附）